

## ◆基調講演

### 「熊楠と紀州的自然観 —東北的自然観との比較をみつめて」

熊楠といえばエコロジーといわれるほど浸透したイメージがありますが、この度発生した3.11災害をはじめ、自然=神という場合の荒御霊にあたる災害部分を、今後私たちはどのように対処していけばいいのか、東北にも登場した自然観の探究者たちとの比較をまじえながら、熊楠をベースにして、自然との付き合い方を探ります。



### 荒俣 宏 (博物学者・作家)

昭和22年東京生まれ。  
慶応大学法学部卒業。都市災害小説ともいえる『帝都物語』で文壇デビューし、以後、博物学を中心に執筆活動を展開する。愛知万博グローバルハウス・ナビゲーター、名古屋開府総合プロデューサーなどを歴任。多摩美術大学にて博物学の美術史を研究中。

## ◆研究発表

### 「『南方曼陀羅』の新次元へ —理不思議と大不思議—」 唐澤太輔 (早稲田大学社会科学総合学術院・助教)

那智山麓における「さびしき限り」の暮らしの中、南方熊楠の思想は最も深化した。そして生まれたのが、いわゆる「南方曼陀羅」である。この奇妙な図には、熊楠の自然観・神観が隠されている。「南方曼陀羅」は主に五つの要素(エレメント)から成り立っている。「物不思議」「心不思議」「事不思議」「理不思議」「大不思議」である。これまで多くの研究者たちがこの「曼陀羅」の解釈に挑んできた。しかし、それらは「事」「物」「心」の各「不思議」までの解釈に留まっていたように思われる。残る二つの要素「理不思議」と「大不思議」とは一体何なのか。また両者の関係はいかなるものなのか。これらについて突き詰めた研究は今までほとんどされてこなかった。本発表では、この「理不思議」と「大不思議」を中心に述べる。

人間の知が辛うじて及ぶ領域(直接的推理・予知・第六感によって捉えられる領域)——それが「理不思議」である。そして「事」「物」「心」「理」全てを包み込み、また全てを生み出す根源的な場が「(大日如来の)大不思議」である。「大不思議」こそ、まさに「生命そのもの」「自然そのもの」なのである。

### 「南方熊楠の修養法」 野村英登 (東洋大学 TIEPh 研究員)

「わしなんかこうして、この部屋にジーと坐っていても、ちっとも淋しいとは思わぬ。昼でも夜でも、好きな時に、昔馴染の娘でも、後家さんでも、呼び出すことができる。……たとえばじゃネ、一つの粘菌の発見でもじゃ、……一種の靈感によって、これはと思う物を採集して来る。するとメッタに間とは外れぬ。……また吾輩が旅行から帰るとき、汽船が田辺から数丁の所まで来ると、家で何も知らず寝ている妻の耳に、平常通りわしの声で、今帰ったとはっきり聴きとれる。そこで妻は戸を開けて待っているのじゃ。こんなことぐらいは、ちょっと修養ができて人間なら、誰にでもできる心靈現象じゃ。」

以上は、南方熊楠が65歳になる昭和5年に、訪問者に語った言葉として記録されている。霊を呼び出すことや、千里眼やテレパシーを使うことが、天才熊楠ならぬ凡人の我々にもできるという。熊楠の考えていた修養法がどんなものだったのか、考察してみたい。

### 「南方熊楠の比較説話研究と大蔵経 —『田辺拔書』の黄檗版抄録の意義について—」 増尾伸一郎 (東京成徳大学人文学部教授)

南方熊楠は14年間に涉った欧米での研究生活を切り上げて明治33年(1900)に帰国すると、熊野・那智山中で隠花植物や茸類の採集・調査を3年間続けた後、紀伊・田辺に居を構えた。日露戦後の地方改良事業の一環として打ち出された神社祭祀政策に対して、自然環境と地域文化保全の立場から精力的に反対運動を展開する一方で、自宅近くの法輪寺から黄檗版大蔵経を借覧し、1911年春から約3年半にわたって、ほぼ連日抄録を進めた。

「田辺拔書」と呼ばれる帰国後の抄録は合計61冊を数えるが、黄檗版の抄録は20冊分、4,000頁に及ぶ。全体の約3分の1,500余種の仏典を、多忙を極めた時期に熱心に書き写し、要約し、注記を加えたのはなぜか。

帰国後の執筆活動の重要な課題となった比較説話研究の諸論考は『十二支考』をはじめとして、文字通り古今東西の膨大な文献を駆使したものが、とくにインド以東のアジアにおいては、漢訳仏典を媒介とする説話の東西交渉・伝播に注目すべきことを、欧米の学界に向けて発信するための基礎作業であった可能性が高い。

### 「南方熊楠と紀州田辺」 安田忠典 (関西大学人間健康学部准教授)

2004年7月、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録された。このうち、観光の目玉となっている「熊野古道中辺路ルート」については、約100年前に繰り広げられた南方熊楠らによる神社祭祀反対運動がなければ、世界遺産に登録できるだけの資産を維持できなかったものと思われる。現在では、この活動を評価され「自然保護の先駆者」と呼ばれる熊楠だが、彼が後半生を熊野の入り口である田辺の町で暮らしたことの意義は大きい。熊野古道をはじめとする田辺市や周辺地域の魅力を、熊楠の研究活動やその生活ぶり等と照らし合わせながら紹介したい。



### 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

TIEPhとは、Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy(「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ)の略称である。センター(Center)ではなくイニシアティブとしたのは、「エコ・フィロソフィ」という新しい分野を作り上げるための先導性を重視したからである。

インド哲学・中国哲学を中心とした自然と人間に関する東洋の知とエコロジーの哲学的研究をはじめ、社会心理学を中心としたサステイナビリティに関する人間の行動と自然観・生活観・科学観といった価値観の探求、さらにエコロジカルな環境デザインを追究する3ユニットを組織している。

●東洋大学 TIEPh <http://www.toyo.ac.jp/site/tieph>

### 和歌山県田辺市“文化の香る城下町・口熊野田辺”の魅力

海と山の美しい風景に包まれた田辺市沿岸部(田辺エリア)は、かつて「牟婁の津」と呼ばれ、熊野詣が盛んになった平安時代中期以降は、熊野古道中辺路と大辺路との分岐点であったことから「口熊野」と呼ばれるようになり、熊野三山に向かう宿場町、水陸交通の要衝として栄えてきました。そして江戸時代には、紀州藩主徳川頼宣公の附家老安藤直次のもと城下町として栄え、紀南の政治・経済・文化の中心地として発展してきました。英雄・文化人も多く輩出し、なかでも田辺の三偉人といわれる武蔵坊弁慶、博物学・民俗学の南方熊楠翁、合気道の開祖植芝盛平翁などが有名で、闘雞神社や高山寺といった、こうした偉人のゆかりの地も市内のあちこちに残されています。

自然景観では、市街地を少し外れると日本のナショナルトラスト運動のさきがけとして有名な天神崎をはじめ、桜と紅葉の名所である奇絶峡、一目三十万本と謳われる紀州田辺梅林を有するなど、風光明媚なところでもあります。

また、温暖湿潤な気候を活かした果樹栽培、特に梅の生産が盛んで、梅干しや梅酒などは当地を代表する特産品です。カツオやシラス、紀州イサキといった海の幸も豊富で、こうした新鮮な食材を使った料理を提供する飲食店も多く、とりわけ200軒以上が軒を連ねる「味光路」は県内でも有数の飲食店街として週末ともなれば多くの人出で賑わいます。

皆さん豊かな自然、文化、食が満載の和歌山県田辺市に、ぜひお越しください。

●田辺観光協会 <http://www.tanabe-kanko.jp>

